

一旦裸地となったこの土地にどのように樹木が育ってきたのかを記録した
ものがあると面白いと思うのだが、そのようなものがあるはずがない。ただ、
過去の航空写真を探して見てみると興味深いことがわかった。一九六一年の航
空写真からは、この土地を含め周りは一面雑木林で、自然に恵まれた環境であっ
たことがわかる。それが十年後の一九七一年の航空写真では木が一本もない裸
地に変わってしまった。この時点では家は一軒も建っていない。その五年
後の一九七六年の航空写真では家らしき建物が六軒確認できる。都市計画法が
制定され市街化を抑制すべき区域として市街化調整区域の指定制度ができたの
が一九六八年で、それがこの土地に適用されるまで少し時間差があったと思わ
れるが、それもあつて駆け込みでつくられたのではないかと思われる。

その写真を拡大して見ると、木と思われる影が何本か確認できる。それから
また十年近く後の一九八五年の航空写真では木の影が列としてつながってき
ているのがわかる。その木の列は丁度四角い土地の北西から南東にかけて対角線
状に位置している。建物は四角い土地に平行に建っているので人工的に植えた
木としては配置が不自然である。どうして対角線に木が列をなして生えたのか。
その分野の専門的知識があるわけではないので、あくまで素人考えであるが、
次のようなことだったのではないか。

もともとの地形が土地の北東から南西に向けての傾斜地で、そこを平らに造
成するにあたって、北東の土地を削り南西に埋めたとすると、木の生えている
対角線は表土が比較的残っていたのではないか。裸地のなかでかううじて育つ
のに適した土があるところに風や生き物の力をかりて偶然降り立つことができ
た種が、一生懸命根をおろした結果だとすると感慨深い。

今は、いろいろなところに木が生えて明確に対角線の木の列は認識できな
い。それから三十五年以上経つので土もできてきたのかもかもしれない。ただ、よ
く見ると同じ種類の木が小さな集落をつくっているように見える。大きな木の
まわりに同じ種類の小さな木が確認できる。ハンノキの集落、ヤナギの集落、
ヤチダモの集落、ミズナラの集落などなど。それがさほど広くない敷地に点在
するように広がり、その隙間を埋めるようにいろいろな種類の木が生えている
のだ。もっと知識があれば、それぞれの集落やその間を埋める木々が、なぜ、
そこに根をおろすことになったのか、水や土壌との関係で説明できるのかもし
れない。

釣り好きのTさんが竹山のこの土地の樹木を見たときに、「日頃、釣りで
くところで見える樹木とその種類とは違うな。」と話してくれた。ここは樹種が
多様で造林された山で見られるのとは違うということだ。多様性は、単にいろ
いろなものが混在している状態ではなさそう。多様性は、それぞれに適した
場があること。その場を選択できるかどうかは自己的に決定できるというより
他者の力や偶然の力が加わる状態であることが大きい。そして、それらがあ
るグループをつくったとして、その間にさらに生きる隙間があるということか。

